

親子関係の相互認知 II

(小嶋氏の前資料の再分析)

辻岡美延・小高 恵

MUTUAL COGNITION BETWEEN CHILD AND PARENTS : PART TWO
(A Reanalysis of Kojima's Data)

Bien Tsujioka and Megumi Kotaka

Abstract

Kojima's previous data concerning Schaefer's Children's Report of parental Behavior Inventory and its modification for parents (Parent's Report of Parental Behavior Inventory) adapted and administered by him to Japanese junior high school students was reanalyzed by means of the Procrustian factor analysis. The promax reference structure of the total sample of the subjects was regarded as the target with constrained factor correlations in terms of those of 4 kinds of paired samples: 150 pairs of son-father, 150 pairs of son-mother, 153 pairs of daughter-father, 153 pairs of daughter-mother.

In the first-order factor analysis, 7 primary factors were obtained. These consisted of 3 pairs of factors which were moderately correlated but linearly independent between child and parents with the same titles: Emotional Support, Emotional Control, Autonomy and one common factor "Identification." which loaded on both Children's and Parents' Reports.

Three second-order factors were obtained. Those were Acceptance, Emotional control and Autonomy loaded on both parent's and children's primary factor in each.

Key words : parents-child relationship, procrustian factor analysis, Japanese junior high school students, emotional support, emotional control, autonomy, identification

抄 録

小嶋氏によって中学生に実施された Schaefer の Children's Report of Parental Behavior Inventory と、小嶋氏が選定した親に対する改訂版 (Parent's Report of Parental Behavior Inventory) に関する小嶋氏のデータがプロクラステス因子分析によって再分析された。被験者の全サンプルのプロマックス解準拠構造を標的として、4種の組：息子-父の150組、息子-母の150組、娘-父の153組、娘-母の153組の準拠構造が求められた。

一次因子分析において、7個の一次因子が得られた。それらは、子供と親とに同名の、両者間で中程度に相関しつつ、一次独立である3組の因子：情緒的支持、感情的統制、自律性と、子供と親の報告に同時に負荷する共通因子としての「同一化」の因子であった。二次因子分析においては、親の情緒的支持と子供の情緒的支持の一次因子と、同一化の因子が二次の受容の因子に統合され、親の感情的統制と子供の感情的統制と同一化の一次因子が二次の感情的統制の因子に統合された。親の自律性の因子と子供の自律性の一次因子は二次の自律性の因子に統合された。

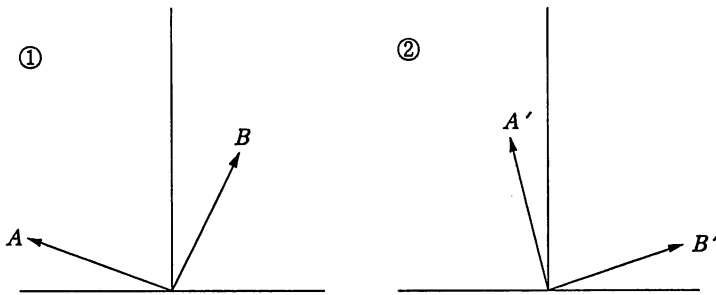
キーワード：親子関係、プロクラステス解法、情緒的支持、感情的統制、自律性、同一化

〔問 題〕

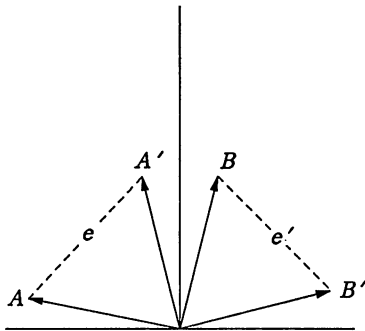
親子関係の因子分析的研究は過去から今日において多くなされてきている。海外では、Slatrer, P. E (1962) の Parental Role Pattern Questionnaire, Roe, A. & Siegelman, M. (1963) の Parent-Child Relations Questionnaire, Siegleman, M. (1965) の Bronfenbrenner Parent Behavior Questionnaire, Schaefer, E. S (1965a, 1965b) の Children's Reports of Parental Behavior Inventory (CR-PBI) などの質問紙形式の論文が発表された。一方、わが国においては、品川不次郎 (1958) らの「田研式親子関係診断テスト」が最も有名であるが、Schaefer の CR-PBI から出発した小嶋氏の研究 (1969) や辻岡, 山本の一連の研究 (1975a, 1975b, 1976, 1977a, 1977b, 1977c, 1978) も代表的なものとしてあげられるであろう。従来、Schaefer (1965b) の研究に関する因子分析的研究においては、①受容対拒否 (Acceptance versus Rejection) ②心理的統制 (Psychological Control) あるいは心理的自律性対心理的統制 (Psychological Autonomy versus Psychological Control) ③ゆるい統制 (Lax Control), あるいは厳しい統制対甘い統制 (Firm Control versus Lax Control) と名付けられた3種の因子しか見いだされておらず、また、Siegelman (1965) の研究においても、①愛情 (Loving) ②罰 (Punishment) ③厳しい要求 (Demanding) の3種の因子しか見いだされていない。Goldin (1969) は、Schaefer の受容対拒否 (Acceptance versus Rejection) と Siegelman の愛情 (Loving) が類似しており、Schaefer の心理的自律性対心理的統制 (Psychological Autonomy versus Psychological Control) と Siegelman の厳しい要求 (Demanding) が類似していると述べている。そして、Schaefer と Siegelman の研究の因子分析のモデルにある親の行動に関する子どもの報告を元にして、1 Loving, Acceptance-Rejection 2 Demanding, Psychological Control-Psychological Autonomy 3 Punishment 4 1と2の交差面 (Loving と Demanding の交差面) の4要因を経験的に分類している。しかしながら、独立した同一化の因子とよぶ因子の存在は認められていない。これに対して、辻岡, 山本の研究 (1975a, 1975b, 1976, 1977a, 1977c, 1978) においては同一化の因子の存在が確かめられている。「子どもに対する親の行動」という親子の相互認知に関する辻岡, 山本の研究 (1977c) では、親と子どもとの「へその緒」、すなわち、分身的愛の強度を測定すると考えられる ID 因子の存在することが提案されている。そして、父一息子、父一娘、母一息子、母一娘の4種のいずれにおいても転移可能性を保持するような質問紙「親子関係診断尺度 EICA」が因子的真實性の原理のもとで作成されている。(辻岡・山本 1976)

本研究では、過去になされた辻岡, 山本の研究 (1977c) を Schönemann (1966) のプロクラステス法を用いることによって、さらに再分析を行った。プロクラステス法は、はじめ、Mosier (1939), Schönemann (1966), Ten Berge (1977) らによって提案されたが、これは類似性の

最大化の原理に基づいて、異なる集団からえられた因子空間を同定しようという構想によるものである。そして、このプロクラステス回転により2つ以上の因子空間が同じ因子から成り立つことが証明された場合、この測定の因子的不変性は検証されたことになり、そのことによって、その尺度の因子的妥当性が保たれたことになる。例えば、次のような被験者集団の異なる①②についてそれぞれの主因子解を求め、その因子構造を比較した場合、その因子構造が異なって見える時がある。このような場合でも、因子構造が異なるとは即断せず、以下のような回転を行ってみる必要がある。

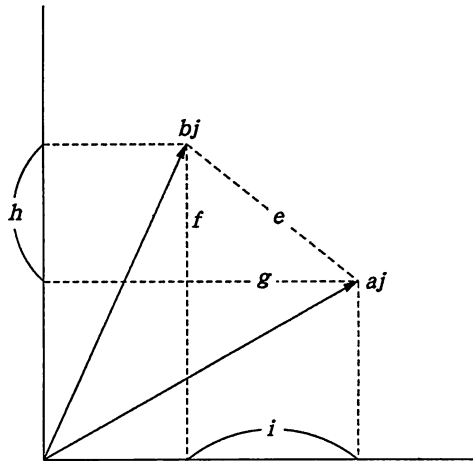


①②を1つの平面に表してみると下図のようになる。



この場合、プロクラステス法を用いて、 e, e' の対応変量ベクトル頂点間のユークリッド距離の最小化を行い、類似構造を導くことにより、集団を異にする因子構造が比較しやすくなる。本研究で適用したプロクラステス法は転移変換型解法を用いた2群間比較のPatternmax法である。これは基準集団の因子軸体系を保持することを目指した手法であり、因子得点行列を一定と仮定し、因子負荷量（もしくは因子パターン）行列の不変性を追求するものである。

すなわち、Fig. 1において、誤差行列は $E = B_0 - AT_0$ （ただし、 T_0 はプロクラステス変換行列）と表され、 $T_0' T_0 = T_0 T_0' = I$ のもとで、 $\text{tr}(E'E)$ を最小化することによって求められるのである。この $\text{tr}(E'E)$ を最小化する手続きは T_0 が正規直交行列であるという条件のもとで、 $\text{tr}(T_0 A_0 B) = \text{tr}(A_0 T_0 B_0)$ を最大化する手続きと同じである。そして、 $T_0 = PQ'$ と表されるのである。ここで、 $A_0' B_0 B_0' A_0 = P A P'$ 、 $B_0' A_0 A_0' B_0 = Q A Q'$ である。そして、この T_0 を用いて基準集団（B集団）を標的に標本集団（A集団）をプロクラステス回転し、その因子負荷行列に基準集団（B集団）のVarimax変換行列 $T_{v,B}$ 、およびPromax回転に伴う因子軸変換行列 $T_{p,B}$ 、 $T_{r,B}$ を乗じて最終斜交をもとめる。なお、先の研究では、群間の因子間相関はそれぞれ異なっていたが、この方法論では2群の因子構造を同一の因子間相関で比較するものである。尚、今回の



- (注) ① a_j (標本集団の第 j 番目の変量ベクトル)
 ② b_j (基準集団の第 j 番目の変量ベクトル)
 ③ 直角三角形 efg と各座標上における頂点間の距離 h, i との関係は, $f=h, g=i$ である。頂点間のユークリッド距離 e を最小にするためには, h^2+i^2 を最小にすればよいのである。

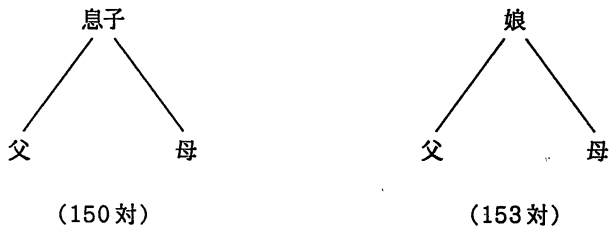
Fig.1 対応変量ベクトル頂点間のユークリッド距離 (辻岡・柴田 (1983) 参照)

研究手順を図示すれば Fig. 2 に示す通りである。

(詳細に関しては辻岡・柴田 (1983), 柴田・辻岡 (1984), 柴田 (1985) を参照) 分析方法に関しては以下の通りである。

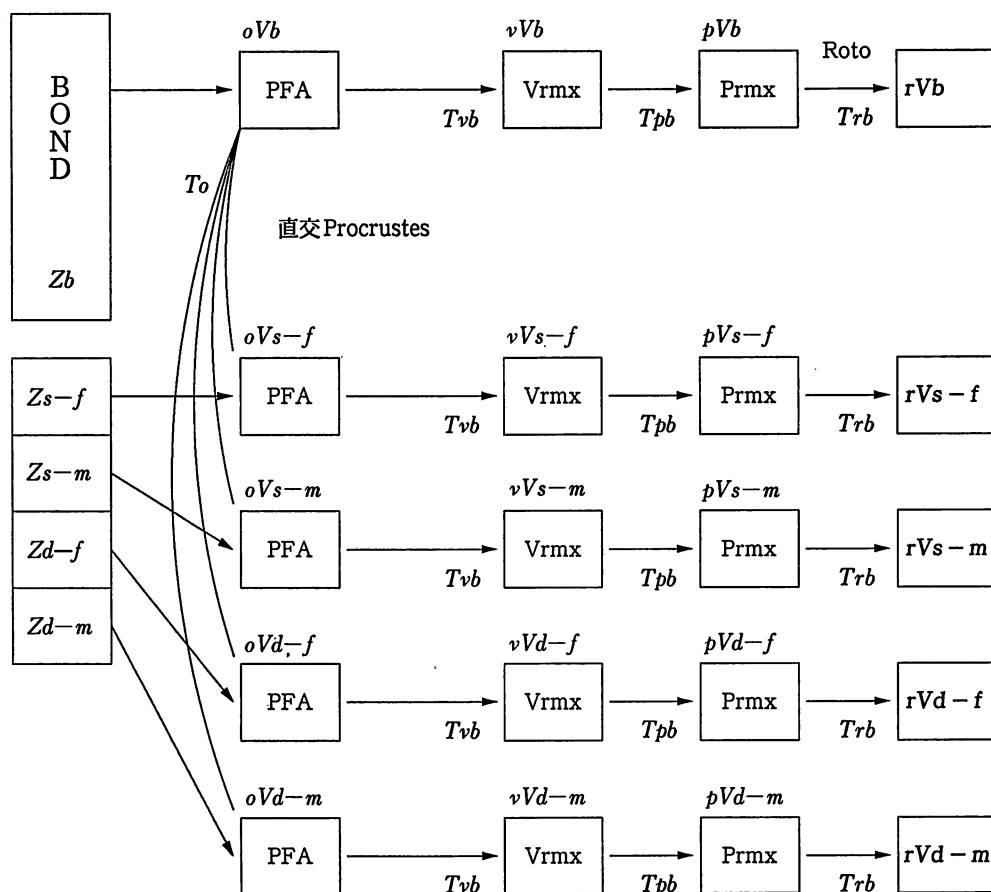
[方 法]

被験者 小嶋氏の調査における被験者は次に示す通りである。



すなわち, 一人の息子とその両親 (150組), また, 一人の娘とその両親 (153組) で, 被験者の平均年齢は子ども13.3才, 父親45.3才, 母親40.6才であった。(小嶋 1969, Kojima, H. 1975)

尺度名 小嶋氏の資料で用いられた尺度は, Schaefer の18尺度192項目からなる質問紙で, その



注) PFA 主因子解
 Vrmx Varimax 解
 Prmx Promax 解
 Z_B Bond サンプルの標準得点行列
 Z_{s-f} son-father の標準得点行列
 Z_{s-m} son-mother の標準得点行列
 Z_{d-f} daughter-father の標準得点行列
 Z_{d-m} daughter-mother の標準得点行列
 T_{vB} Bond サンプルの Varimax 変換行列
 T_{pB} Bond サンプルの Promax 変換行列
 T_{rB} Bond サンプルの Reference structure への変換行列

Fig. 2 斜交の因子間相関固定の直交プロクラステス法

うち、6尺度 (AC, PI, AI, HD, RE, HC) は16項目、残り12尺度は8項目からなっている。なお、各尺度名とその尺度に含まれる代表的な項目内容は次に示す通りである。

1 AC (ACCEPTANCE : 受容)

子どもへの質問

私のなやみや心配ごとを理解している。

私と一緒にものごとをするのが好きだ。

親への質問

子どものなやみや心配ごとを理解している。

子どもと一緒にものごとをするのが好きだ。

2 **CH** (CHILD-CENTEREDNESS : 子ども中心主義)

子どもへの質問

私の喜ぶようなことを、いつも考えている。

親の生活の全部は、子どもを中心としたものである。

親への質問

子どもが喜びそうなことを、いつも考えている。

わたしの全生活は、子どもを中心にしたものである。

3 **PO** (POSSESSIVENESS : 所有欲)

子どもへの質問

私になにか起こるといけないからといって、よそへ行かせてくれない。

私が大きくなって、外で過ごす時間が多くなったのを、残念に思っているようだ。

親への質問

子どもになにか起こるといけないからといって、あまりよそへ行かさないようにしている。

子どもが大きくなって、外で過ごす時間が多くなったのを、残念に思う。

4 **RE** (REJECTION : 拒否)

子どもへの質問

私のことを、困った子どもだという。

まるでわたしが邪魔者であるかのようなそぶりを見せる。

親への質問

子どもに、あなたは困った子どもだという。

子どもが邪魔者になるようなそぶりを示すこともある。

5 **CO** (CONTROL : 統制)

子どもへの質問

私の行儀をよくするために罰を与えるのは、正しいことだと思う。

いいつけどおりにしなさいといいはる。

親への質問

子どもの行儀をよくするために罰を与えるのは、正しいことだと思う。

いいつけどおりにしなさいといいはる。

6 **EN** (ENFORCEMENT : 強制)

子どもへの質問

私に対して、たいへんきびしい。

きつい罰をあたえる。

親への質問

子どもに対してきびしい態度で接する。

厳しく罰するほうだ。

7 **PI** (POSITIVE INVOLVEMENT：積極的関与)

子どもへの質問

私と一緒に読んだ本のことを、話し合うのが好きだ。

私が学校や遊びから帰ってくると、ことばをかけてくれる。

親への質問

子どもと一緒に読んだ本のことを話し合うのが好きだ。

子どもが学校や遊びから帰ってくると、ことばをかけてやる。

8 **IN** (INTRUSIVENESS：干渉的)

子どもへの質問

外のできごとを何でも話さないという。

私が外で誰と一緒にいたかを知りたがる。

親への質問

外のできごとを何でも話さないという。

子どもが外で誰と一緒にいるかを知っておきたい。

9 **CG** (CONTROL THROUGH GUILT：罪悪感による統制)

子どもへの質問

私がいうことをきかないと、恩知らずだと考える。

私のために、どれだけ苦勞してきたかをきかせる。

親への質問

子どもがいうことをきかないと、恩知らずだと思ってしまう。

子どものために、どれだけ苦勞してきたかをきかせる。

10 **HC** (HOSTILE CONTROL：敵対的統制)

子どもへの質問

私のしたまちがいを、すぐには忘れない。

うちでの私の行動が好きでない。

親への質問

子どものしたまちがいを、すぐには忘れられない。

うちでの子どもの行動に、好きになれないところがある。

11 **IC** (INCONSISTENT DISCIPLINE : 一貫しないしつけ)

子どもへの質問

親は、自分のつくったきまりをすぐ忘れてしまう。

親は自分の都合のよいときだけ、きまりを守る。

親への質問

自分でつくったきまりを忘れてしまうことがある。

自分の都合のよいときだけ、きまりを守るということになりがちである。

12 **NO** (NONENFORCEMENT : 非強制)

子どもへの質問

私がよくない行いをして、ふつうは気がつかない。

私を与えられた仕事をしなくても、やかましく言わない。

親への質問

子どもがよくない行いをして、ふつうは気がつかない。

子どもを与えられた仕事をしなくても、やかましく言わない。

13 **AI** (ACCEPTANCE OF INDIVIDUAL : 個性化の受容)

子どもへの質問

私がふざけて親をからかっても気にしない。

私のもののみかたを理解しようとする。

親への質問

子どもがふざけて私をからかっても気にしない。

子どものもののみかたを理解しようとする。

14 **LD** (LAX DISCIPLINE : 甘いしつけ)

子どもへの質問

私のいいなりになる。

私の悪い行いをあまりとがめない。

親への質問

子どものいいなりになるほうだ。

子どもの悪い行いをあまりとがめだてしない。

15 **IP** (INSTILLING PERSISTENT ANXIETY : 永続的不安感情の押し付け)

子どもへの質問

悪いことをすれば、いつかは必ず、むくいをうけるものだという。

私のした悪いことについて、くり返しくり返し私に話をする。

親への質問

悪いことをすれば、いつかは必ず、むくいをうけるものだという。
子どものした悪いことについて、くり返し子どもに話をする。

16 **HD** (HOSTILE DETACHMENT：非好意的離反)

子どもへの質問

私のことを、しょうがない子どもだけれど仕方がないと思っている。
私からしばらくはなれているのを、喜んでいるように思えることがよくある。

親への質問

しょうがない子どもだけれど仕方がないと思う。
子どもからしばらくはなれていたいこともある。

17 **WR** (WITHDRAWAL OF RELATIONS：関係の撤回)

子どもへの質問

私が親をおこらせると、冷たい、そっけない調子で話す。
私が親の期待にそむくと、私を見ないようにする。

親への質問

子どものことで腹がたつと、子どもにそっけない調子で話す。
子どもが私の期待にそむくと、子どもを見ないようにする。

18 **EA** (EXTREME AUTONOMY：自由放任)

子どもへの質問

好きなだけ、何回でも、外出させてくれる。
したいことはなんでもさせてくれる。

親への質問

子どもの好きなだけ、何回でも、外出させる。
子どものしたいことはなんでもさせている。

分析手続き

- ① 父一息子（150対）、父一娘（153対）、母一息子（150対）、母一娘（153対）、さらにこれら4種の資料を結合したデータ（606対、以後これを結絆サンプルと呼ぶ）の5種についての親子の36×36尺度の相関行列を算出した。
- ② これらの5種の相関行列の固有値をもとめ、Scree Test（辻岡・東村1975）により、共通因子数をいずれも7個と定め、主因子法による繰返し法で共通性を推定した。収束精度は0.0001とした。
- ③ 結絆サンプルについての主因子法とそれに続く Varimax 回転により直交7因子を求め、

Promax 法で斜交回転し、斜交解を求めた。

- ④ 上で求めた結絆サンプルの斜交解を数回 Rotoplot 法（辻岡，藤村1975）で回転し、単純構造化をはかった。
- ⑤ 結絆サンプルを含めた5群間の因子パターンができる限り近似するように、結絆サンプルの主因子解を標的行列として各4群の主因子解に対して Schonemann のプロクラステス法を適用し、そのあと結絆サンプルの最終解への変換行列（④で求めたもの）を乗じて5群の因子間相関を同一にしつつ、因子の同定を行った。
- ⑥ 二次因子分析においては、一次因子相関行列を主成分分析し、Varimax 回転を行った後に、Promax 法で斜交回転を行い、さらに Rotoplot 法（3回）により単純構造化をはかった。

〔結 果〕

I 一次因子分析

- ① それぞれの群の一次因子準拠構造と結絆サンプル (bond sample) の一次因子準拠構造との一貫性係数

Table 1-1 はプロクラステス回転後の準拠構造 V_B の一貫性係数の結果である。この平均値をみると、ES-C 因子 (0.980)、ES-P 因子 (0.970)、CO-C 因子 (0.967)、CO-P 因子 (0.986)、AU-C 因子 (0.940)、AU-P 因子 (0.959)、ID 因子 (0.796) と高い値を示している。また、他の因子間の一貫性係数は低い値を示しており、独立した因子であると考えられる。すなわち、これら7つの因子は共通因子として解釈することが望ましいと思われる。

また、Table 1-2 は親と子どもとの間の一貫性係数の結果である。これをみると情緒的支持の因子、統制の因子、自律性の因子（娘—母を除く）では、0.900以上の高い値を示しており、親も子どもも類似した構造をもっている。次に同一化の因子に注目してみると、bond sample では0.814 と高い値を示している。しかし、群間では、息子—母の組合せが最も高く (0.780)、娘—父の組合せで最も低く (0.598) になっており、他の3つの因子に比べ多少低いように思われる。

Table 1-1 Coefficient of congruence between the reference structure of the bond sample and those of the 4 samples

	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	AU-C	AU-P	ID
父—息子	0.987	0.975	0.978	0.993	0.960	0.975	0.856
父—娘	0.979	0.981	0.974	0.986	0.973	0.980	0.905
母—息子	0.982	0.951	0.964	0.981	0.960	0.963	0.824
母—娘	0.973	0.971	0.951	0.984	0.866	0.919	0.599
Mean	0.980	0.970	0.967	0.986	0.940	0.959	0.796

Table 1-2 Coefficient of congruence between the reference structures of parent's sample and those of children's sample

	ES	CO	AU	ID
BOND SAMPLE	0.976	0.966	0.968	0.814
息子-父	0.956	0.973	0.944	0.613
息子-母	0.935	0.956	0.919	0.780
娘-父	0.961	0.958	0.949	0.598
娘-母	0.951	0.952	0.769	0.620

また、母親と子どもとの同一化の程度は父親と子どもとの同一化に比べ、わずかであるが高い。すなわち、子どもの認知している同一化の因子構造は親の認知している同一化の因子構造とは少し異なると予想され、それはその組合せによって、幾分異なると思われる。

② 一次因子の解釈（Table 2-1～2-5 参照）

一次因子を解釈するにあたり、基準として同一化の因子（ID 因子）以外については、0.400以上の負荷を持つものを解釈した。また、ID 因子については、親と子どもと同じ尺度が同時に0.200以上の負荷をもつものを解釈の基準とした。

第1因子 子ども側の親の情緒的支持の因子（ES-C）

この因子には、子ども側の受容（AC 0.762）、子ども中心主義（CH 0.669）、拒否（RE -0.404）、積極的関与（PI 0.687）、個性化の受容（AI 0.699）、非好意的離反（HD -0.445）に高い負荷を示す。これを群別にみると、他の群ではみられないが、父親と娘の間では、統制の尺度にも負荷している（CO 0.418）。この統制の尺度は娘と父の間においては、子供側の情緒的支持の次元を表わす1つの尺度と考えられる。すなわち、統制的な父親であると娘が感じるほど、情緒的に支持してくれると認知する傾向があることを意味するのである。そして、この因子は、親側の尺度に負荷しない、最高でも、父-娘の間における親側の関係の撤回の尺度に（WR -0.246）負荷するだけである。

第2因子 親側の親の情緒的支持の因子（ES-P）

この因子には、親側の受容（AC 0.726）、子ども中心主義（CH 0.592）、積極的関与（PI 0.586）、個性化の受容（AI 0.730）に高い負荷を示す。これを群別にみると、他の群ではみられないが、父親と娘の間では、拒否の尺度に対して負の負荷を示している（RE -0.413）。すなわち、

Table 2-1 Bond Sample の準拠構造

	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	AU-C	AU-P	ID
1 AC	0.762	0.026	-0.027	0.004	-0.039	-0.033	0.036
2 CH	0.669	-0.031	-0.042	-0.003	0.008	-0.012	0.132
子 3 PO	0.293	-0.160	0.136	0.016	-0.050	0.040	0.368
ど 4 RE	-0.404	0.005	0.588	-0.040	0.193	0.047	-0.022
も 5 CO	0.353	-0.035	0.453	0.065	-0.269	0.016	-0.030
側 6 EN	0.052	0.055	0.685	0.003	-0.179	-0.027	-0.185
か 7 PI	0.687	0.036	0.101	-0.008	-0.007	-0.059	0.034
ら 8 IN	0.286	-0.066	0.237	-0.032	-0.123	-0.003	0.286
の 9 CG	-0.025	-0.125	0.456	0.098	0.068	-0.020	0.111
報10 HC	0.104	-0.059	0.537	-0.049	-0.215	0.006	0.114
告11 IC	-0.191	-0.038	0.369	0.051	0.244	0.085	0.076
12 NO	-0.074	0.036	-0.054	-0.018	0.580	-0.030	0.004
13 AI	0.699	0.011	-0.104	-0.009	0.030	-0.045	0.006
14 LD	0.135	-0.068	0.016	-0.002	0.525	-0.017	0.194
15 IP	0.150	-0.011	0.532	-0.036	-0.100	-0.020	0.046
16 HD	-0.445	-0.051	0.465	0.007	0.328	-0.060	-0.020
17 WR	-0.219	0.008	0.531	0.072	0.191	0.009	-0.045
18 EA	0.089	0.107	0.055	0.009	0.474	0.031	-0.194
19 AC	0.043	0.726	-0.004	-0.024	-0.066	-0.001	-0.044
20 CH	-0.054	0.592	-0.078	0.064	0.014	0.013	0.129
21 PO	-0.073	0.072	-0.209	0.532	0.033	0.061	0.315
親22 RE	0.057	-0.354	0.092	0.614	-0.116	0.300	-0.056
側23 CO	0.034	0.186	0.077	0.565	-0.023	-0.219	-0.051
か24 EN	0.092	0.005	0.134	0.609	0.000	-0.189	-0.118
ら25 PI	0.034	0.586	-0.034	0.147	-0.021	-0.007	0.039
の26 IN	-0.060	0.315	-0.058	0.375	0.004	-0.166	0.181
報27 CG	-0.040	-0.112	-0.064	0.661	0.053	0.009	0.174
告28 HC	0.010	-0.017	0.029	0.677	-0.075	-0.059	0.081
29 IC	0.055	-0.163	-0.058	0.435	-0.051	0.414	0.040
30 NO	-0.044	0.013	-0.038	-0.053	-0.027	0.643	0.013
31 AI	0.041	0.730	0.125	-0.092	-0.091	0.076	-0.198
32 LD	0.001	0.103	-0.054	0.063	-0.038	0.631	0.040
33 IP	-0.031	0.093	0.040	0.636	0.075	-0.163	0.019
34 HD	0.024	-0.348	0.080	0.498	-0.041	0.273	-0.117
35 WR	-0.062	-0.252	-0.035	0.552	-0.040	0.266	0.107
36 EA	-0.014	0.139	0.099	0.008	-0.009	0.558	-0.173

父親が娘に対して拒否的であると父親自身が感じているとき、娘を情緒的には支持していないと考えていることを意味する。そして、この因子は子ども側の尺度に負荷しない。最高でも、母一息子の間においての子ども側の一貫しないしつけの尺度に (IC -0.221) 負荷するだけである。

第3因子 子ども側の親の感情的な統制の因子 (CO-C)

この因子には、子ども側の拒否 (RE 0.588)、統制 (CO 0.453)、強制 (EN 0.685)、罪悪感による統制 (CG 0.456)、敵対的統制 (HC 0.537)、永続的不安感情の押し付け (IP 0.532)、非好意的離反 (HD 0.465)、関係の撤回 (WR 0.531) の尺度が高い負荷を示している。この因子は Schaefer の心理的自律性対心理的統制 (Psychological Autonomy versus Psychological Control) に類似している。つまり、子どもに感情的に圧力をかけて統制するといった、親のエゴイスティックな統制であると思われる。これを群別にみると、母親と娘の間では、子ども側の

Table 2-2 父一息子の準拠構造

	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	AU-C	AU-P	ID
1 AC	0.766	-0.050	-0.035	0.028	-0.074	-0.003	0.114
2 CH	0.709	-0.009	0.019	0.059	-0.007	-0.021	0.052
子 3 PO	0.317	-0.026	0.295	0.071	-0.020	-0.011	0.213
ど 4 RE	-0.373	-0.042	0.622	-0.098	0.124	0.084	-0.031
も 5 CO	0.287	-0.052	0.528	0.051	-0.242	-0.004	-0.034
側 6 EN	0.017	-0.089	0.588	-0.069	-0.184	-0.030	0.003
か 7 PI	0.692	-0.015	0.171	-0.022	0.012	-0.064	0.078
ら 8 IN	0.269	-0.068	0.286	0.021	-0.089	0.071	0.270
の 9 CG	0.031	-0.109	0.469	0.153	0.171	-0.116	0.110
報10 HC	0.125	-0.063	0.558	0.005	-0.101	-0.052	0.084
告11 IC	-0.093	-0.104	0.365	0.022	0.119	0.159	0.112
12 NO	-0.095	-0.071	-0.070	-0.018	0.600	-0.028	0.088
13 AI	0.709	-0.087	-0.129	0.029	0.051	-0.029	0.036
14 LD	0.110	-0.087	-0.018	-0.077	0.485	0.005	0.314
15 IP	-0.224	0.023	0.549	-0.035	-0.142	-0.046	0.030
16 HD	-0.425	0.009	0.540	0.000	0.361	-0.075	-0.105
17 WR	-0.178	-0.054	0.543	0.052	0.196	0.016	0.005
18 EA	0.094	0.076	0.136	0.020	0.536	-0.067	-0.294
19 AC	0.010	0.686	-0.111	-0.007	-0.137	0.124	0.055
20 CH	-0.048	0.567	-0.095	0.099	-0.011	0.048	0.098
21 PO	-0.003	0.100	-0.123	0.612	0.064	-0.056	0.197
親22 RE	0.072	-0.393	0.071	0.574	-0.123	0.366	-0.006
側23 CO	0.033	0.231	0.043	0.609	-0.016	-0.279	-0.053
か24 EN	0.159	-0.065	0.099	0.648	-0.100	-0.176	-0.062
ら25 PI	-0.049	0.593	-0.085	0.130	-0.016	-0.009	0.110
の26 IN	-0.081	0.342	-0.059	0.403	0.015	-0.202	0.178
報27 CG	0.009	-0.079	-0.122	0.690	0.003	0.029	0.287
告28 HC	-0.024	-0.045	-0.030	0.686	0.020	-0.132	0.183
29 IC	-0.030	-0.215	-0.010	0.440	-0.025	0.351	0.074
30 NO	-0.041	0.086	0.042	-0.147	-0.094	0.725	-0.087
31 AI	-0.002	0.745	0.183	-0.123	-0.085	0.050	-0.253
32 LD	0.008	0.106	-0.103	0.096	-0.021	0.652	0.077
33 IP	0.039	0.098	0.062	0.656	0.001	-0.145	-0.014
34 HD	-0.010	-0.259	0.149	0.508	0.017	0.311	-0.234
35 WR	0.021	-0.278	-0.113	0.622	-0.113	0.303	0.123
36 EA	0.012	0.136	0.012	-0.049	-0.025	0.586	-0.120

一貫しないしつけに負荷している（IC 0.477）。すなわち、娘にとっては、母親が一貫しないしつけを行うことは母親のエゴイスティックな態度であると感じていると思われる。そして、この因子は親側の尺度には負荷しない。最高でも、母一息子の間においての親側の所有欲の尺度に（PO -0.378）負荷するだけであ。

第4因子 親側の親の感情的な統制の因子（CO-P）

この因子には、親側の所有欲（PO 0.532）、拒否（RE 0.614）、統制（CO 0.565）、強制（EN 0.609）、罪悪感による統制（CG 0.661）、敵対的統制（HC 0.677）、一貫しないしつけ（IC 0.435）、永続的不安感情の押し付け（IP 0.636）、非好意的離反（HD 0.498）、関係の撤回（WR 0.552）の尺度が高い負荷を示している。この因子もまた、Schaeferの心理的自律性対心理的統制（Psychological Autonomy versus Psychological Control）に類似している。つまり、子

Table 2-3 父一娘の準拋構造

	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	AU-C	AU-P	ID
1 AC	0.715	0.104	-0.030	-0.013	-0.090	0.048	0.045
2 CH	0.698	-0.105	-0.074	0.068	0.023	-0.052	0.130
子 3 PO	0.245	-0.164	0.163	-0.073	-0.054	0.024	0.318
ど 4 RE	-0.393	-0.027	0.528	0.078	0.229	0.059	0.019
も 5 CO	0.418	-0.010	0.518	0.118	-0.281	-0.061	-0.123
側 6 EN	0.120	0.090	0.639	0.093	-0.303	-0.055	-0.197
か 7 PI	0.657	0.100	0.033	0.005	-0.094	-0.014	0.075
ら 8 IN	0.368	-0.164	0.152	-0.064	-0.196	0.007	0.351
の 9 CG	-0.104	-0.082	0.507	0.090	0.031	-0.033	-0.003
報10 HC	0.129	-0.009	0.575	-0.078	-0.283	0.032	0.046
告11 IC	-0.334	0.083	0.314	0.063	0.272	0.114	0.110
12 NO	-0.090	0.045	-0.154	0.092	0.591	-0.064	0.085
13 AI	0.686	0.024	-0.152	0.061	0.067	-0.058	0.005
14 LD	0.126	-0.029	-0.070	0.005	0.623	-0.162	0.153
15 IP	0.191	-0.047	0.532	-0.083	-0.157	-0.007	0.030
16 HD	-0.489	-0.085	0.364	0.024	0.334	-0.119	0.036
17 WR	-0.321	0.062	0.480	0.086	0.211	0.037	0.019
18 EA	0.095	0.161	0.038	0.055	0.419	0.102	-0.245
19 AC	0.043	0.754	0.034	-0.046	-0.108	0.007	-0.052
20 CH	-0.074	0.614	-0.037	0.018	0.063	-0.050	0.144
21 PO	-0.050	0.024	-0.216	0.551	0.103	0.099	0.309
親22 RE	0.126	-0.413	0.105	0.585	-0.172	0.304	-0.018
側23 CO	0.039	0.219	0.160	0.515	-0.003	-0.235	-0.104
か24 EN	0.135	-0.006	0.176	0.608	0.054	-0.240	-0.113
ら25 PI	0.052	0.561	-0.079	0.163	0.002	-0.002	0.129
の26 IN	-0.066	0.345	-0.012	0.408	-0.006	-0.116	0.091
報27 CG	-0.050	-0.136	-0.065	0.651	0.084	-0.037	0.157
告28 HC	0.018	0.048	-0.003	0.707	-0.044	-0.104	0.075
29 IC	0.032	-0.042	-0.008	0.354	-0.054	0.494	-0.014
30 NO	-0.064	-0.069	-0.198	-0.049	-0.034	0.661	0.133
31 AI	0.114	0.740	0.171	-0.078	-0.068	0.052	-0.213
32 LD	0.018	0.138	-0.020	0.010	-0.029	0.614	-0.085
33 IP	-0.051	0.159	0.078	0.613	0.149	-0.225	-0.041
34 HD	0.165	-0.372	0.148	0.394	-0.147	0.305	-0.169
35 WR	-0.246	-0.287	-0.151	0.545	0.029	0.270	0.270
36 EA	0.051	0.140	0.181	0.088	-0.050	0.550	-0.294

どもに心理的に圧力をかけて統制するといった、親の感情的な統制であり、自己愛の現れであると思われる。群別にみると、父一息子の組合せにおいて、親側の干渉 (IN 0.403)、父一娘の組合せにおいて、親側の干渉 (IN 0.408) が負荷している。すなわち、父親の子どもに対する干渉的な態度は、父親のエゴイスティックな統制の表れであると解釈できる。そして、この因子は子ども側の尺度には負荷しない。最高でも、母一息子の間においての子ども側の甘いしつけの尺度に (LD -0.162) 負荷するだけである。

ところで、CO-C 因子と CO-P 因子との違いは自己愛的な意味を認知するか否かにあると思われる。例えば、親と子どものそれぞれの所有欲の尺度をみると、子どもの所有欲の尺度は CO-C 因子に高く負荷していない (父一息子関係で 0.295, 父一娘関係で 0.163, 母一息子関係で 0.120, 母一娘関係で 0.158)。しかし、親の所有欲の尺度は CO-P の因子に高く負荷している (父

Table 2-4 母一息子の準拠構造

	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	AU-C	AU-P	ID
1 AC	0.781	-0.073	-0.052	-0.018	0.044	-0.073	0.062
2 CH	0.674	-0.016	-0.006	-0.102	0.014	0.053	0.066
子 3 PO	0.330	-0.177	0.120	0.030	-0.104	0.089	0.343
ど 4 RE	-0.397	-0.094	0.542	-0.068	0.203	-0.007	0.038
も 5 CO	0.297	-0.010	0.429	-0.013	-0.225	0.122	-0.012
側 6 EN	0.028	-0.004	0.650	0.009	-0.132	-0.035	-0.108
か 7 PI	0.690	-0.053	0.104	0.002	0.071	-0.070	0.057
ら 8 IN	0.233	-0.094	0.290	-0.086	-0.125	-0.068	0.216
の 9 CG	-0.027	-0.075	0.496	0.087	0.109	0.014	0.114
報10 HC	0.040	-0.124	0.518	-0.052	-0.209	0.003	0.133
告11 IC	-0.066	-0.221	0.325	0.077	0.326	-0.036	0.183
12 NO	-0.018	-0.027	-0.030	-0.055	0.630	-0.174	-0.017
13 AI	0.673	-0.085	-0.080	-0.123	0.046	-0.016	0.026
14 LD	0.113	-0.004	0.187	-0.162	0.468	-0.007	0.000
15 IP	0.158	-0.085	0.481	0.001	-0.103	-0.038	0.092
16 HD	-0.395	-0.047	0.490	-0.016	0.315	-0.087	0.005
17 WR	-0.178	-0.003	0.588	0.040	0.201	-0.007	-0.188
18 EA	0.101	0.074	-0.013	-0.059	0.499	0.094	-0.095
19 AC	0.009	0.666	-0.087	0.014	0.003	-0.124	-0.057
20 CH	-0.141	0.552	-0.151	0.018	0.004	0.006	0.094
21 PO	-0.206	-0.013	-0.378	0.496	-0.012	0.070	0.532
親22 RE	-0.004	-0.355	0.051	0.585	-0.101	0.300	-0.015
側23 CO	-0.020	0.245	0.043	0.524	0.007	-0.125	-0.043
か24 EN	0.045	0.109	0.173	0.608	-0.070	-0.265	-0.253
ら25 PI	0.046	0.535	-0.080	0.094	-0.111	-0.009	0.049
の26 IN	-0.072	0.230	-0.103	0.398	0.019	-0.240	0.173
報27 CG	-0.126	-0.060	0.040	0.643	0.092	-0.020	0.077
告28 HC	-0.024	-0.034	0.126	0.667	-0.153	0.026	-0.007
29 IC	0.116	-0.389	-0.216	0.479	-0.055	0.377	0.184
30 NO	0.065	-0.121	-0.068	0.072	-0.045	0.608	-0.016
31 AI	-0.005	0.692	0.042	-0.160	-0.074	-0.007	-0.237
32 LD	0.018	0.195	0.038	0.011	-0.191	0.682	-0.085
33 IP	-0.042	0.059	0.082	0.600	-0.017	-0.148	-0.011
34 HD	0.053	-0.459	-0.074	0.618	0.054	0.203	-0.015
35 WR	-0.012	-0.223	0.053	0.450	-0.109	0.325	-0.060
36 EA	-0.036	0.198	0.156	-0.057	-0.062	0.609	-0.189

一息子関係で0.612, 父一娘関係で0.551, 母一息子関係で0.496, 母一娘関係で0.477)。また、干渉の尺度をみると、父一息子関係ではCO-C因子に対する子ども側の干渉の尺度は0.286であるのに対し、CO-P因子に対する親側の干渉の尺度は0.403を示している。父一娘においてもCO-C因子に対する子ども側の干渉の尺度は0.152であるのに対し、CO-P因子に対する親側の干渉の尺度は0.408を示している。母一息子関係においてはCO-C因子に対する子ども側の干渉の尺度は0.290であるのに対し、CO-P因子に対する親側の干渉の尺度は0.398を示している。また、母一娘関係においてはCO-C因子に対する子ども側の干渉の尺度は0.190であるのに対し、CO-P因子に対する親側の干渉の尺度は0.319を示している。親の子どもを所有したいという態度や干渉したいという態度は自己愛の表れであると考えられるが、以上の結果より、親にとって、エゴイスティックな統制と自己愛的なものと同じ次元にあると考えられる。しかし、子どもにとっては親が干渉したり、子どもを所有したりする態度は、親の自己愛の表れであるとは認

Table 2-5 母一娘の準拠構造

	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	AU-C	AU-P	ID
1 AC	0.723	0.049	-0.100	-0.019	0.022	-0.090	0.042
2 CH	0.602	0.034	-0.050	-0.104	0.044	0.005	0.149
子 3 PO	0.290	-0.149	0.158	-0.017	0.012	0.061	0.293
ど 4 RE	-0.436	0.091	0.630	-0.030	0.154	0.071	-0.108
も 5 CO	0.308	-0.063	0.336	0.050	-0.242	0.015	0.087
側 6 EN	-0.057	-0.004	0.533	-0.039	-0.042	-0.061	0.003
か 7 PI	0.640	0.064	-0.017	-0.032	0.005	-0.058	0.058
ら 8 IN	0.272	-0.069	0.190	-0.038	-0.079	-0.022	0.338
の 9 CG	0.038	-0.132	0.508	0.052	-0.090	0.096	-0.038
報10 HC	0.097	-0.054	0.584	-0.112	-0.238	0.040	0.081
告11 IC	-0.247	0.077	0.477	0.036	0.192	0.129	-0.099
12 NO	-0.154	-0.012	-0.277	0.008	0.734	0.004	0.296
13 AI	0.720	0.118	-0.080	-0.034	-0.028	-0.084	-0.016
14 LD	0.342	-0.109	0.108	0.215	0.298	0.218	-0.008
15 IP	0.072	-0.033	0.503	-0.010	-0.025	-0.008	0.100
16 HD	-0.414	-0.117	0.433	0.061	0.229	0.034	0.066
17 WR	-0.264	-0.003	0.483	0.112	0.142	0.008	-0.014
18 EA	0.164	0.087	0.057	0.092	0.381	0.020	-0.233
19 AC	0.060	0.735	0.023	-0.040	0.003	-0.058	-0.051
20 CH	0.015	0.603	-0.059	0.106	-0.001	0.068	0.077
21 PO	-0.054	0.218	-0.049	0.477	0.039	0.120	0.118
親22 RE	-0.069	-0.298	0.040	0.701	0.058	0.159	0.008
側23 CO	0.084	0.145	0.190	0.584	-0.075	-0.211	-0.174
か24 EN	0.039	-0.111	-0.008	0.614	0.192	-0.156	0.113
ら25 PI	0.021	0.551	-0.056	0.186	0.038	0.008	0.076
の26 IN	-0.092	0.308	-0.094	0.319	-0.025	-0.072	0.209
報27 CG	0.029	-0.106	-0.012	0.624	-0.041	0.143	0.023
告28 HC	0.035	0.058	0.153	0.626	-0.127	0.034	-0.123
29 IC	0.048	-0.056	-0.068	0.462	-0.024	0.448	0.030
30 NO	-0.131	0.074	-0.036	0.003	0.198	0.411	0.226
31 AI	0.016	0.652	0.016	-0.012	-0.089	0.136	-0.005
32 LD	0.039	0.058	-0.025	0.089	-0.108	0.737	0.090
33 IP	-0.078	-0.003	-0.100	0.686	0.065	-0.063	0.113
34 HD	-0.093	-0.323	0.078	0.576	0.065	0.127	0.020
35 WR	-0.104	-0.289	-0.008	0.567	0.076	0.178	0.193
36 EA	-0.003	0.169	0.159	0.064	0.034	0.520	-0.214

知していないように思われる。

第5因子 子ども側の親の自律性の因子 (AU-P)

この因子には、子ども側の非強制 (NO 0.580)、甘いしつけ (LD 0.525)、自由放任の尺度 (EA 0.474) が負荷を示している。そして、この因子は子ども側の尺度には負荷しない。最高でも、母一娘の間においての親側の非強制の尺度に (NO 0.198) 負荷するだけである。

第6の因子 親側の親の自律性の因子 (AU-P)

この因子には、親側の一貫しないしつけ (IC 0.414)、非強制 (NO 0.643)、甘いしつけ (LD 0.631)、自由放任の尺度 (EA 0.558) が負荷を示している。これを群別にみると、母一娘では親側の一貫しないしつけの尺度がこの因子に負荷している (IC 0.448) のに対し、娘側では一貫

しないしつけの尺度は子ども側の感情的統制の因子に負荷している（IC 0.477）。親にとっては厳しすぎる統制を避けるため一貫しないしつけを行っているのであろうが、娘にとっては親の勝手なしつけとしかうけとっていないと考えられる。そして、この因子は子ども側の尺度には負荷しない。最高でも、母一娘の間においての子ども側の甘いしつけの尺度（LD）に0.218負荷するだけである。

第7因子 同一化の因子（ID）

この因子は親と子に現れる共通因子であり、子どもと親の所有欲の尺度に負荷しており（PO 0.368）（PO 0.315）、親と子どもとの同一化傾向、もしくは甘えを表わす次元と考えられる。群別にみると特に異性の組み合わせ（父一娘（PO 0.318, 0.309）、母一息子（PO 0.343, 0.532））で、その傾向がみられる。また、母一娘の間では非強制の尺度（NO 0.296, 0.226）と干渉の尺度（IN 0.338, 0.209）が共通して現れる。一方、父一息子の間においては同時に負荷する尺度は持たない。このことは娘は父に、息子は母に一体感を感じている傾向があることを示していると考えられる。この因子に0.3以上負荷しているものをみると、bond sample においては子ども側の PO（所有欲）、IN（干渉）と親側の PO（所有欲）である。すなわち、親の所有欲が強いと子どもが感じれば感じるほど、親の方も子どもを所有したいと感じるという傾向があるということを示している。そして親と子どもの絆が強くなればなるほど親も子どもも養育態度としての所有欲は強いと感じる傾向がある。これを群別にみると、

父一息子の組合せ

子ども側の LD（甘いしつけ）が負荷をしている（0.314）。すなわち、息子は、父親の甘さは、甘いしつけを行うことであると認知している。しかしながら、父親は甘いしつけが父親の甘さの現れであるとは思っておらず、甘いしつけを行うことは自律性を重んじているのだとしか感じていない。

父一娘の組合せ

子ども側の PO（所有欲）（0.318）、IN（干渉）（0.351）、親側の PO（所有欲）（0.309）が負荷している。すなわち、娘は、甘え一甘えられるという関係は、父親の所有的な態度や干渉する態度の中で見られると認知している。また、父親も娘を所有したいという態度が父親の甘さの表われであると考えており、その点においては認知ギャップはないように思われる。しかし、干渉面においては娘の方は甘えの表われであると認知しているのに対して、父親のほうでは親のエゴイスティックな自己愛の態度の一部分であると認知していることが予想される。

母一息子の組合せ

子どもの側の PO（所有欲）（0.343）、親側の PO（所有欲）（0.532）が負荷している。すなわ

ち、息子は、甘え—甘えられるという関係は、母親の所有的な態度の中で現れると認知している。また、母親も息子を所有したいという態度が母親の甘さの表われであると考えているように思われる。

母—娘の組合せ

子どもの側の IN (干渉) (0.338), が負荷している。すなわち、娘は、甘え—甘えられるという関係は、母親の干渉的な態度の中で見られると認知している。しかし、母親のほうでは子どもに干渉することは、親のエゴイスティックな態度の一部分、もしくは情緒的支持の一部分であると認知していることが予想される。

しかし、この傾向はこの年齢の被験者において (息子13.4才、娘13.3才) 見いだされる関係であるのかどうかはわからない。このことは今後の問題となるであろう。また、本研究では第7因子があまり顕著な因子構造として現われなかったが、これは用いられた尺度に同一化傾向についての項目を含む尺度があまり含まれていないためであるとも考えられることに注意しなければならない。

③ 一次因子間相関

Table 3 は7個の一次因子間相関を示した表である。順次解釈していくと、

Table 3 Primary factor correlation of bond sample

	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	AU-C	AU-P	ID
ES-C	1.000	0.367	0.077	-0.090	0.250	0.104	0.305
ES-P	0.367	1.000	-0.005	0.220	0.015	-0.032	0.404
CO-C	0.077	-0.005	1.000	0.302	-0.006	0.049	0.568
CO-P	-0.090	0.220	0.302	1.000	-0.140	0.058	0.225
AU-C	0.250	0.015	-0.006	-0.140	1.000	0.501	-0.091
AU-P	0.104	-0.032	0.049	0.058	0.501	1.000	-0.066
ID	0.305	0.404	0.568	0.225	-0.091	-0.066	1.000

ES-C ES-P 0.367

子ども側の情緒的支持の因子と親側の情緒的支持の因子との間では正の相関が現われている。すなわち、親が子どもに対して情緒的に支持していると感じれば感じるほど、子どもの側でも親は自分を情緒的に支持してくれていると認知している傾向があるということを示している。

CO-C CO-P 0.302

子ども側の感情的な統制の因子と親側の感情的な統制の因子の間では正の相関が現れる。このことは、親が子どもに対してエゴイスティックな統制をおこなっていると思うほど、また、子どもを自己愛の対象と感じているほど、子どもは親がエゴイスティックな統制をおこなっていると認知している傾向があることを示している。

AU-C AU-P 0.501

子ども側の自律性の因子と親側の自律性の因子の間では正の相関が見られる。親が子どもの自律性を重んじていると感じているほど子どもの側も親は自律性を重んじてくれていると感じていることを示している。

ID ES-C 0.305

子どもの情緒的支持の因子と ID 因子の間では正の相関を示している。すなわち、親と子どもとの同一化傾向が強ければ強いほど、子ども側では親は情緒的に支持してくれると認知する傾向があるということを示している。

ID ES-P 0.404

親側の情緒的支持の因子と ID 因子の間では正の相関を示している。すなわち、親と子どもとの同一化傾向が強ければ強いほど、親側では子どもに対して情緒的に支持していると認知しているという傾向があるということを示している。

ID CO-C 0.568

子どもの統制の因子と ID 因子の間では強い正の相関が現われている。すなわち、親と子の同一化傾向が強い場合、子ども側では親が子どもに対して感情的な統制をおこなっていると考えられる傾向があると思われる。

しかしながら、同一化の因子と自律性の因子との相関は、親側、子ども側いずれにもほぼ 0 に近い値をしている。以上からも分かるように、ID 因子は感情的な統制の次元と情緒的支持の次元に関係があるように思われる。

Ⅱ 二次因子分析

さて、上記で見いだされた 7 個の一次因子（結絆サンプル）について二次因子分析を行なった。Table 4 は二次因子分析の結果を示したものであり、Table 5 は二次因子間相関を示したものである。その結果、ほぼ独立した、二次の受容の因子、感情的な統制の因子、自律性の因子の二次因子が抽出された。7 個の一次因子のうち、親側と子ども側のそれぞれの因子、すなわ

Table 4 Secondary reference structure

			二次因子		
			AC	CO	AU
一 次 因 子	子ども側の情緒的支持	ES-C	0.815	-0.089	0.217
	親側の情緒的支持	ES-P	0.786	0.119	-0.131
	子ども側の感情的統制	CO-C	0.083	0.840	0.138
	親側の感情的統制	CO-P	-0.034	0.699	-0.026
	子ども側の自律性	AU-C	0.176	-0.176	0.838
	親側の自律性	AU-P	-0.030	0.067	0.865
	同一化	ID	0.573	0.662	-0.094

Table 5 Secondary factor correlation of bond sample

	AC	CO	AU
AC	1.000	-0.032	-0.015
CO	-0.032	1.000	-0.010
AU	-0.015	-0.010	1.000

ち、ES-P 因子と ES-C 因子、CO-P 因子と CO-C 因子、AU-P 因子と AU-C 因子は「二次の AC 因子」「二次の CO 因子」「二次の AU 因子」としてまとめ、ID 因子は「二次の AC 因子」(0.573) と「二次の CO 因子」(0.662) の双方に高い負荷を示す。すなわち、親の情緒的支持が強ければ強いほど、また、そのように子どもが認知するほど、親と子どもとの同一化傾向は強くなることを意味しており、同様に、親の感情的な統制が強くなればなるほど、また、子どもがそのように認知すればするほど、親と子どもとの同一化傾向は強くなることを意味している。

第 I 因子 Acceptance (AC 因子)

この因子は子ども側の情緒的支持の因子 (0.815)、親側の情緒的支持の因子 (0.786)、同一化の因子 (0.573) に大きく負荷している。すなわち、子どもに対して、情緒的に支持していると親が感じるに従って、また子どもも親が情緒的に支持してくれていると感じるに従って、親と子の同一化傾向は強くなることを示している。

第 II 因子 Emotional Control (CO 因子)

この因子は親と子どもの統制の因子に高く負荷し (0.699, 0.840)、ID 因子に対しても、高く

負荷する。(0.662) すなわち、子どもに対して、感情的な統制を行っていると感じ、子どもを自己愛の対象にしているにしたがって、また子どもも親が感情的な統制を行っていると感じるに従って、親と子の同一化傾向、甘え-甘え合いは強くなることを示している。

第Ⅲ因子 Autonomy (AU 因子)

この因子は親と子どもの自律性の因子に高く負荷する (0.865, 0.838) ことからこの因子は親と子との自律性の次元を代表するものと考えられる。

このことを図に示したのが Fig. 3-1 から Fig. 3-3 である。この図からもわかるように親と子どもとの間ではほぼ一致した認知をおこなっているように思われる。特に Fig. 3-2 をみると、ID 因子（同一化の因子）は ES 因子（情緒的支持の因子）と CO 因子（感情的な統制の因子）の間にあり、同一化の因子が独立した2つの因子（受容の因子と感情的な統制の因子）の媒介となっていることがうかがえられる。すなわち、親が子どもに対して感情的な統制を行うことと、子どもに愛情をかけてやることとは一見独立しているように見えるが、そうでないようで

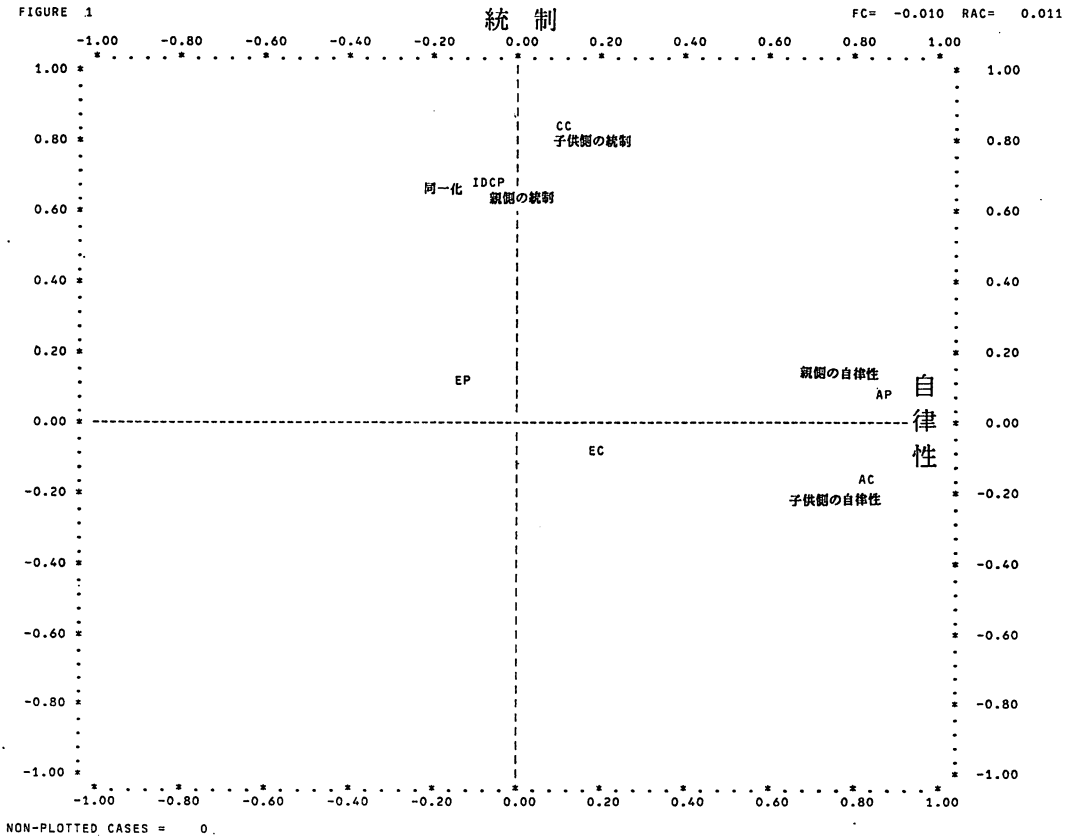


Fig. 3.1 Plot of the secondary factor analysis

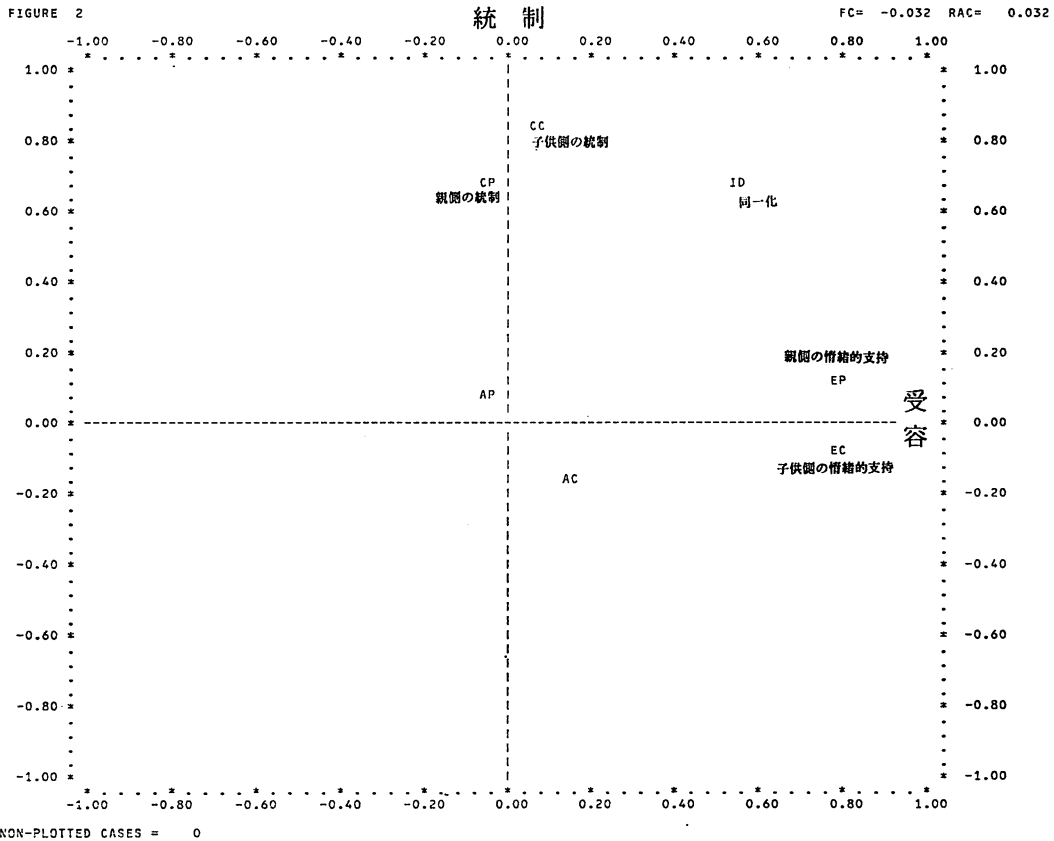


Fig. 3.2 Plot of the secondary factor analysis

ある。親の感情的な統制はおそらく、子どもに不信や疑いを生み出すと思われる。しかし、親と子どもの甘え—甘えられるという関係が存在するためにそういったギスギスした親子は癒され、愛情のある関係が提供されると思われる。いわば、潤滑油の役目を担っていると考えられるのである。以上のように、二次3因子の構造は、親子間では整合的、併行的であり、矛盾はないように思われる。しかし、先にも述べたように、Schaefer の尺度においては、同一化の因子に関する項目はさほど含まれていないことに注意を払わなければいけない。同一化に関する項目は辻岡、山本が作成した親子関係診断尺度 EICA にはより多く含まれており、今後の研究はこの尺度を用いて分析することが望ましいと思われる。

〔考 察〕

今回の研究により、親子関係における「子どもに対する親の行動」の相互認知において、7個の一次因子と3つの二次因子が存在することを確認した。そして、一次因子レベルでの同一化の因子が独立した2つの因子（二次の受容の因子と二次の感情的な統制の因子）の仲介となってい

親子関係の相互認知Ⅱ（辻岡・小高）

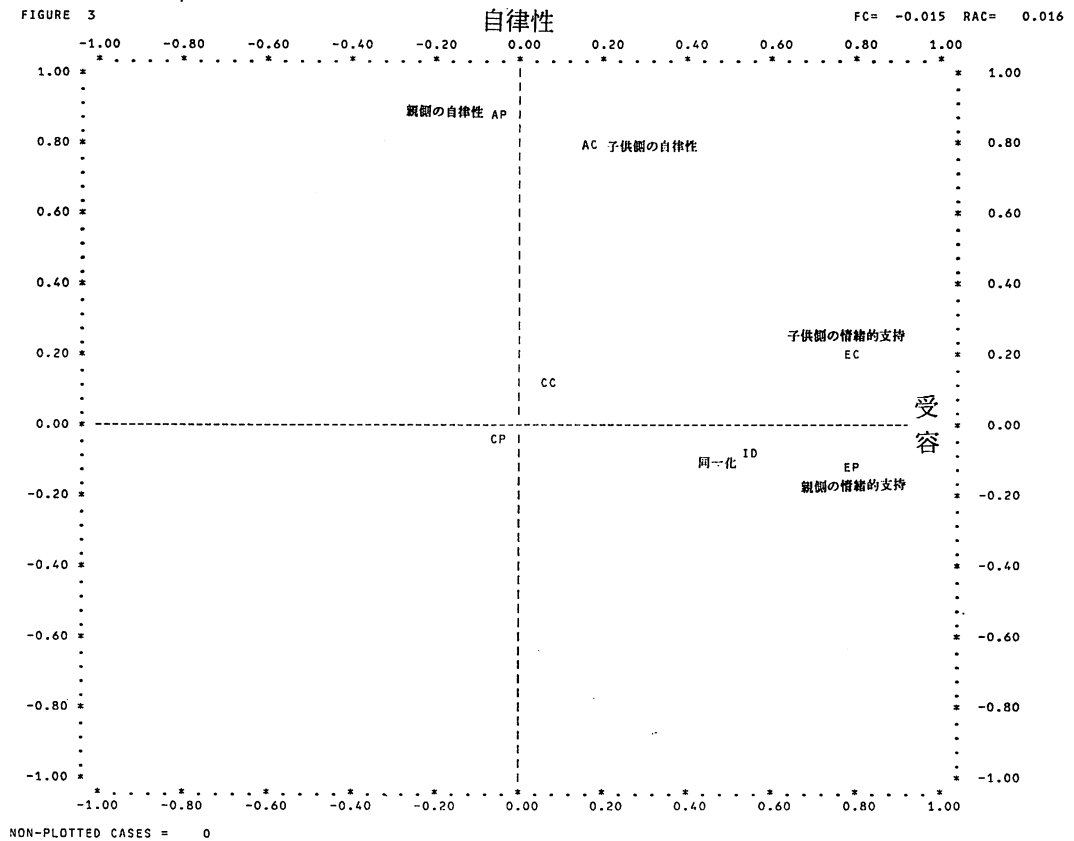


Fig. 3.3 Plot of the secondary factor analysis

ることが明らかにされた。しかし、本研究で用いられた小嶋氏の資料の尺度（Form-II）においては、Schaeferの18尺度の改訂版をそのまま適用したために同一化に関する項目がほとんど含まれていなかった。そして、その結果、独立した二次の同一化の因子は現われなかった。一次因子分析の結果現われたID因子（同一化の因子）は親と子どもとに共通して現われた因子であり、この因子はいわゆる「へその緒」であり親から子への、また子から親への「分身的愛」を測定する因子と考えられる。このことは単に人間対人間という問題ではなく、血を分けた親と子という特殊な人間関係を意味しているように思われる。また、先にも述べたようにID因子（同一化の因子）はAC因子軸（受容の因子）とCO因子軸（感情的な統制の因子）との間にあり、同一化の因子が独立した2つの因子（受容の因子）と（感情的な統制の因子）の媒介となっている。すなわち、感情的に圧力をかけて子どもを統制する親のエゴイスティックさと子どもを受容するということが、独立しており、一見、別々のものであると思われる。しかし、この両者は親子関係における矛盾的併存を示すものと思われる。例えば、子どもに対して繰り返して小言を言う親の態度と、子どもに対して繰り返して小言を言う親の受容的な態度がそれを示している。しか

し、そういった矛盾的不協和も同一化の因子が存在することによって、これらの葛藤は止揚され軽減されると思われる。ただ、本研究においては尺度水準にまでさかのぼることができないため、項目水準にまでさかのぼって明らかにすることはできなかったが、延長因子分析を用いれば項目水準にもどって分析することができるので、そのような親子の矛盾的葛藤の現状が明らかになるように思われる。ところで、第7番目に現われた因子分散は非常に小さいものであった。多くの研究者たちは Guttman の latent-root-one criterion によって因子数を決定しがちであったために、この部分を切り捨ててしまう誤りを起こす傾向があった。しかしながら、ID 因子はバッテリーの中では実質的に機能しており、その心理学的な意味は非常に大きいと考えられる。

ID 因子の存在の有無について推測されうることは、この同一化の因子が我が国で特に強く培われてきたものと思われる。西欧においては、母親と子どもの関係は、10代になると母親は子どもを1人の独立した大人として扱い、甘えることを許さない。しかし、日本の場合、母親と子どもの関係は年をとっても甘えが続くと考えられる。土居（1981）は「甘えの構造」の中で、フロイドの同一化 (Identification) の概念が「甘え」に該当すると述べている。彼によるとフロイドは同一化という概念で日本人のいう「甘え」という言葉で想起するものを記述しようとしていたと考えている。また、「甘えの心理的原型」について述べているくぐり、「甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとすることである。」と記している。これとは別に、井上（1973）は「親子関係は子どもの成長とともに質的に変化するものであるし、また変化するものでなければいけない。親が子どもをいつまでも、保護し、包み込むという乳幼児の関係がいつまでも続くことはあり得ない。しかし、日本の親子、特に、現代の親子は母子関係は非常に緊密で情緒的な色彩が濃い。そのため、子どもが成長して、親から自立しようとするとき、親はそれに対応する心の準備ができていないため驚くのである。青年の親からの「心理的離乳」に対応して、親の方でも子どもの成長を認め、自分との関係にある意味で「断つ」こと、「ヘソの緒を切る」ことによってより良い関係を展開する必要があると考えられる。」と述べている。筆者らは、同一化の因子が、これらの問題に対処する優れた指標になるものと考えているのである。

例えば、同一化傾向が強すぎる場合、心理的離乳は困難になり、独立心のない無責任な行動が生じるであろうと予想される。また、逆に同一化傾向が弱すぎる場合、信頼感や安定感が与えられず、不信感の強い子どもになってしまう恐れがあると予想される。すなわち、年齢に応じた適切な同一化傾向をもつことが必要なのであり、親子の間で、健康な甘え—甘えられるという関係が望まれる。

さて、今回の同一化の因子は、二次の受容の因子と二次の感情的な統制の因子とにかなり強く結合しており、これを受容の因子、あるいは統制の因子として測定することもできるかもしれない。しかし、問題性をかかえたある特殊な親子関係においては、これら三者 (AC, CO, ID) の

結合力は弱く、分離してしまうことも想定される。親子関係を診断するにあたっては、このような因子間の結合や分離の様態をも考慮にいれなければいけないと思われる。

〔要 約〕

1. Schaefer の CR-PBI を採用した小嶋(1969, 1975) の資料①父一息子, ②父一娘, ③母一息子, ④母一娘, さらに⑤これらの4種のデータを結合した結絆サンプル (bond sample) の尺度間相関行列を因子分析し, 結絆サンプルの主因子解を標的行列として各4群の主因子解に対して Schönemann のプロクラステス法を適用し, そのあと結絆サンプルの最終解への変換行列を乗じて5群の因子間相関を同一にしつつ, 因子の同定を行い, その結果, 一致性係数の高い7個の一次因子が抽出された。
2. 7個の一次因子とは, 親と子においてそれぞれ一次独立に出現する情緒的支持の因子 (ES), 感情的統制の因子 (CO), 自律性の因子 (AU) の因子と, 親と子において共通の次元として出現した同一化の因子 (ID) である。
3. 7個の一次因子のうち, 親側と子ども側のそれぞれの因子, すなわち, ES-P 因子と ES-C 因子, CO-P 因子と CO-C 因子, AU-P 因子と AU-C 因子は「二次の AC 因子」「二次の CO 因子」「二次の AU 因子」としてまとめ, ID 因子は「二次の AC 因子」と「二次の CO 因子」の双方に高い負荷を示した。

参 考 文 献

- Goldin, P. C. 1969 A review of children's reports of parent behaviors. *Psychological Bulletin* 71 (3), 222-236.
- 井上健治 1973 「子どもにとって親とは何か」 加藤一郎編 親と子 p. 98. 東京大学出版会
- 小嶋秀夫 1969 親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析 金沢大学教育学部紀要 (人文科学編), 18, 55-70.
- Kojima H. 1975 Inter-battery factor analysis of parents' and children's reports of parental behavior. *Japanese Psychological Research*, 17(1), 33-48.
- Mosier, C. I. 1939 Determining a simple structure when loadings for certain tests are known. *Psychometrika*, 4, 149-162.
- Roe, A. & Siegelman, M. 1963 A parent-child relations questionnaire. *Child Development*, 34, 355-369.
- Schönemann, P. H. 1966 A generalized solution of the orthogonal Procrustes problem. *Psychometrika*, 31, 1-10.
- Schaefer, E. S. 1965a Children's reports of parental behavior : An inventory. *Child Development*,

36, 413-424.

- Schaefer, E. S. 1965b A configurational analysis of children's reports of parent behavior. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 552-557.
- 辻岡美延・柴田 満 1983 確認的因子分析のための総合確認システム — Patternmax 型解法と総合確認システム — 関西大学社会学部紀要, 14, (2), 149-179.
- 柴田 満・辻岡美延 1984 確認的因子分析における因子的不変性の評価 関西大学社会学部紀要, 16, (1), 91-132.
- 柴田 満 1985 確認的因子分析における多群間比較の方法——多群間における因子的不変性の総合確認システム—— 関西大学社会学部紀要, 17, (1), 67-107.
- Siegelman, M. 1965 Evaluation of Bronfenbrenner's questionnaire for children concerning parental behavior. *Child Development*, 36, 163-174.
- 品川不二郎・品川孝子 1958 田研式親子関係診断テストの手引 日本文化科学社
- Slatrer, P. E. 1962 Parental behavior and the personality of the child. *Journal of Genetic Psychology*, 101, 53-68.
- Ten Berge, J. M. F. 1977 Orthogonal Procrustes rotation for two or more matrices. *Psychometrika*, 42, 267-276.
- 辻岡美延・藤村和久 1975 確認的因子分析における検査尺度構成(斜交因子解のための Rotoplot 法) 関西大学社会学部紀要, 8(1), 46-52.
- 辻岡美延・山本吉廣 1975a 斜交軸回転による因子構造の交叉妥当化——親子関係テストについての一結果—— 関西大学社会学部紀要, 8(1), 53-66.
- 辻岡美延・山本吉廣 1975b 確認的因子分析における行動予測の研究(親子関係の4次元——SchaeferのCR-PBIの分析——) 関西大学社会学部紀要, 7(1), 146-160.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976 親子関係診断尺度 EICA の作成——因子的真实性の原理による項目分析—— 関西大学社会学部紀要, 7(2), 1-14.
- 辻岡美延・山本吉廣 1977a 子どもの出生順位による親子関係と人格形成 関西大学社会学部紀要, 8(1), 103-120.
- 辻岡美延・山本吉廣 1977b 父母による親子関係の認知——養育態度・行動の同調性について—— 関西大学社会学部紀要, 8(1), 157-170.
- 辻岡美延・山本吉廣 1977c 親子関係の相互認知——小嶋氏の原資料の一分析—— 教育心理学研究, 25(1), 18-29.
- 辻岡美延・山本吉廣 1978 親子関係の類型——親子関係診断尺度 EICA—— 教育心理学研究, 26(2), 19-28.
- 土居健郎 1981 甘えの構造(第2版) p. 82. 弘文堂選書